

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	玉井潤野
論文題目	The Mother of All Innocence: Family, Letters, and Violence in the Works of Thomas Pynchon (無垢の根源 — トマス・ピンチョン作品における家族、文字、暴力)		
(論文内容の要旨)			
<p>トマス・ピンチョンは1963年に『V.』(V.)でデビューした現代アメリカ文学を代表する作家である。本論文では彼の第3作『重力の虹』(<i>Gravity's Rainbow</i>)から最新作『ブリーディング・エッジ』(<i>Bleeding Edge</i>)までを発表順にとりあげ、彼の文学的言語の発展を分析している。東西冷戦の緊張感が高まった時期に出発したピンチョンは、核戦争という圧倒的暴力への問題意識を有していた。論文第1章では、『重力の虹』の架空のロケット兵器が、解釈行為と言語を不可能にすることを明らかにする。第2章で分析する『ヴァインランド』(<i>Vineland</i>)はすでに冷戦体制が崩壊寸前であった時期に発表され、ピンチョンが改めて比喩的言語を駆使して作品世界を構築するにいたったことを論証する。文学作品の内部において個々の比喩表現の間に見出されるネットワークを活かしつつ、ピンチョンが『メイスン&ディクスン』(<i>Mason & Dixon</i>)において、アメリカを支える理念であるところの自由と平等の問題に取り組んでいることを、第3章において示している。21世紀のピンチョン文学にとって、2001年の米国同時多発テロが大きな転機になったと考えられる。『逆光』(<i>Against the Day</i>)は、表面上は資本家と無政府主義者との対立を描いているが、両者がいずれも怒りに基づいて政治的暴力に訴え自滅する性質を持つことを第4章で明らかにしている。ピンチョンは、全体主義国家を描いたジョージ・オーウェルの『1984年』(<i>Nineteen Eighty-Four: A Novel</i>)に序文を寄せており、資本主義と国家権力に関する政治的問題意識をオーウェルから受け継いだピンチョンは、第5章で取り上げる『LAヴァイス』(<i>Inherent Vice</i>)において、家族の比喩こそが暴君の政治的力を隠蔽する危険性を描いている。第6章では、ピンチョンにとって根本的な問題である暴力に関して、男性および女性を描く比喩の特徴が作品を経て変化していること、そして暴力抑制の鍵として女性を描く彼の近年の傾向がもっとも顕著に現れた作品として、『ブリーディング・エッジ』を読み解いている。</p> <p>序論“<i>How to Cut our Teeth on Pynchon</i>”では、ピンチョン作品の解釈に伴う困難に対する本論文のアプローチを概説し、そのアプローチの有効性を簡潔に示す。ピンチョンが一貫して特徴的な意味を付与する「歯」ないし「牙」のモチーフを初期の作品から最新作にいたるまでたどり、彼の政治的姿勢について解釈を下すにあたり、作品の物語にとって一見副次的な要素が重要であることを論証している。</p> <p>『重力の虹』はピンチョンの代表作であり、第1章“<i>The Voice of the Void in Gravity's Rainbow</i>”では、この作品が解釈行為を不可能にする性質を有することを論じている。通常の解釈は、作者の意図の反映として作品を読み解くが、ピンチョンは作中で、その意図に基づき思考する自我それ自体への懐疑を明確に示している。したがって『重力の虹』は、それを解釈する試みを最終的に拒絶するテキストであることを結論付けている。</p> <p>『重力の虹』以降の長い沈黙を破った『ヴァインランド』を扱う第2章“<i>Vitalization of</i></p>			

『*Language in Vineland*』では、ピンチョンが言語の比喩的用法をより幅広く駆使するようになったことを示す。物語の上で極めて重要な行為が、それに似つかわしくない副次的な登場人物によってなされていることに注目し、90年以降の彼の作品の構成原理が、物理的・心理的な因果関係というより、それらとは独立した言語的連関であることを論じている。

『メイスン&ディクソン』においてピンチョンは、明確にアメリカの政治的理想や歴史的負債を引き受け始めた。この作品を論じた第3章“*Memory and Drudgery in Mason & Dixon*”では、対照的な二人の主人公に注目する。正反対の性質を有するが故に相補的なペアとなりつつ反発しあう主人公たちは、それぞれ自由と平等という究極的理念を体現しているという点を結論としている。

『逆光』は第一次世界大戦や労働運動の盛り上がりを背景とした作品である。これを取り上げる第4章“*The Fathers on Fire of Fury in Against the Day*”では、いずれも作中で殺害される二人の男性登場人物に注目する。物語の中心をしめるこの二人の人物は、いずれも自らの怒りを暴走させた結果自滅している。この点から、『逆光』においてピンチョンが国家権力と資本主義との結びつきに注目し、両者を媒介する男性中心主義、とくに父親の権力の批判を試みていることを論証している。

第5章“*Self-Destruction of Community in Inherent Vice*”では、アメリカ現代史の転換点となった60年代末から70年代にかけての時代をピンチョンが改めて取り上げた作品『LAヴァイス』を扱う。ピンチョンが描くカリフォルニアでは、国外的にはヴェトナム戦争、国内的にはマンソン事件等により共同体の成員が互いへの疑心暗鬼に陥っており、警察権力の暴走を招いている。第5章では、この作品を特にジョージ・オーウェル『一九八四年』とも比較し、ピンチョンが全体主義の脅威を改めて作品化していることを示している。

第6章“*Reconciliatory Maternity in Bleeding Edge*”では、2001年の米国同時多発テロにまつわる陰謀と、それに立ち向かう女性主人公を描いた最新作『ブリーディング・エッジ』を論じる。主人公が用いる銃等の細部から、この作品の下地が、イアン・フレミングによる007シリーズであることを示し、同時に、この作品を愛読したジョン・F・ケネディ大統領に潜在していた危険な男性的理想をピンチョンが批判していることを示している。

結論“*Letter Bomb and Love Letter*”では、ピンチョン文学の変遷を改めて概説している。ピンチョンは当初、言語を絶する暴力について語るため、最終的には読解不可能な作品を残した。ピンチョンの危機感は冷戦終結後も変わらないが、特に『ヴァインランド』以降は、運命論的に破局を受け入れるのではなくそれに抗する試みが続いている。当初のピンチョン文学は、それを完全に読み取ることが読者の象徴的な死を意味する郵便爆弾としてのフィクションであった、と申請者は論じる。他方で現在のピンチョンが、読者を誘惑し、一見避けがたい破局に抵抗する道を模索する恋文としてのフィクションの書き手であることを、申請者は示している。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論は、ポスト・モダンのアメリカ文学を代表する作家トマス・ピンチョンのいくつかの小説を独自の視点から解説した論文である。作品の意味を探ろうとする行為そのものを否定しかねないピンチョンの小説を読むにあたり、申請者は家族、文字、暴力という観点からその文学の本質に迫ろうとする。

序論では、ピンチョン作品の解釈に伴う困難に対する申請者のアプローチを概説し、そのアプローチの有効性を示している。特に、ピンチョンが一貫して特徴的な意味を付与する「歯」ないし「牙」のモチーフを初期の作品から最新作にいたるまでたどっており、ピンチョン作品にとって一見副次的な要素が重要であることを論証しており、説得力に富む。

第1章では、読解不可能性を暗示する『重力の虹』を扱うが、申請者はこの作品が核戦争という表象不可能な暴力を背景にしている点に注目する。さらに、この作品の細部を分析し、その細部から摂食行為と殺害行為とのつながりを浮かび上がらせる。そして登場人物たちが自我の独立性を疑わないために敗北することが示唆されている、と論じる。申請者の一貫したアプローチはここでも妥当なものと思われる。

第2章では『ヴァインランド』が扱われる。前作『重力の虹』においては、物質的基盤にまで分解されることでピンチョンの言語は崩壊したが、『ヴァインランド』では、語の意味を損なうというより二重化する比喩を駆使することで、ピンチョン文学は再出発を記している、と論じる。申請者はここでは自動車と樹木の擬人化に注目し、こうした擬人化は、それらに敏感に反応する登場人物たちを通じて物語の流れを最終的に方向付ける要因であり、人類の滅亡が間近に思われた冷戦期を脱し、ピンチョンは死と破壊に抗する生命の力を描き始めた、としている。やや図式的ではあるが、申請者が独自の読みから結論を導いていることがうかがわれる。

第3章では『メイスン&ディクスン』が扱われ、申請者はこの作品で、ピンチョンが明確にアメリカの政治的理想や歴史的負債を引き受け始めた、とする。そしてメイスンとディクスンという対照的な二人の主人公がそれぞれ自由と平等の理想を体現する、と解する。メイスンについては、外的影響にまるで左右されないことを意味する完全な自由は不可能としても、その理念を目指し試行錯誤をやめない人物とし、ディクスンについては、極端に平等を追求して奴隷商人から奴隷を解放するばかりか、人間ならざる機械や動物と交感し自らをそれらの他者に近づけていく人物、とまとめており、申請者の読みの確かさを感じさせる。

第4章では、第一次世界大戦や労働運動の盛り上がり背景とした『逆光』において、ピンチョンが国家権力と資本主義との結びつきに注目し、両者を媒介する男性中心主義、とくに父親の権力の批判を試みている、とする。強大な力を有し互いに対立する二人の登場人物が自らの攻撃性によって自滅する過程をたどりつつ、ピンチョンが最終的に健全な政治的怒りの担い手として暗示するのは女性ないし子供であるとする結論は、説得力にやや疑問が持たれる。

第5章では、アメリカ現代史の転換点となった60年代末から70年代にかけての時代

をピンチョンが再度取り上げた『LAヴァイス』について論じられる。理想的な共同体のモデルである家族の内部崩壊を描くこの小説では、国外的にはヴェトナム戦争、国内的にはマンソン事件等により共同体の成員が互いへの疑心暗鬼に陥り、家庭が警察権力により侵食される点に、申請者は注目する。そして、この作品が警察的に振舞わざるを得ない探偵の主人公を通じ、ウォーターゲート事件を数年後に控えたアメリカを描いている、というかなり政治的な読み方を展開する。この作品が全体主義の脅威を改めて作品化した、としてジョージ・オーウェルの『一九八四年』とも比較しているが、比較の仕方にやや物足りなさも感じられる。

第6章では『ブリーディング・エッジ』が論じられる。核戦争の恐怖を背景にしたピンチョン文学は噴出する暴力を一貫して男性的なものとして描いているが、女性および母親の役割は、これまでの小説に比べて大きく変化している、とする。そして暴力的な衝突にいたる男性的な破壊と死の力に対する防波堤として女性を描くピンチョンの試みが、『ブリーディング・エッジ』の主人公において最高の完成度を示している、と論じる。さらに、作中の二人の悪役と女性の関係から、戦争やテロ、さらにはあわや核戦争を引き起こしかけたケネディ大統領への批判的まなざしが読み取れる、とする指摘は妥当と思われる。

結論においては、ピンチョン文学があらためて概観される。その文学は当初、想像不可能な暴力の噴出を想像させるという矛盾した課題を反映し、最終的な読解の不可能性に至った。しかし、人類の未来に対するピンチョンの危機感は冷戦終結後も変わらないものの、特に『ヴァインランド』以降は、運命論的に破局を受け入れるのではなくそれに抗する試みが続いている、とする。さらに、ピンチョンが必ずしも明確に描くわけではないその希望を読み取るためには、『ブリーディング・エッジ』の子供のように言語の字義的・比喩的な区分を乗り越える無垢が必要とされる、と論じる。ピンチョン文学に潜むメッセージを読み取ろうとする申請者の姿勢は、やや独断的に見えかねない面はあるものの、評価に値する。

本論文については、引用が不十分であり、解釈が恣意的と言われかねないという弱点、先行研究についての考察が十分とはいえないなど、惜しまれる点があることは事実である。しかしまた本論文には、ピンチョン文学について多年にわたり考察してきた申請者独自のいくつかの知見が見られ、幅広い視野から書かれた本論文は、ピンチョン文学の研究に大きく貢献すると思われる。その意味で、共生人間学専攻思想文化論講座の理念に十分適う優れた研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月17日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降